

小堀桂一郎、田中敏両先生を送るの辞

井上英明

日本文化学部における研究と教育の両輪ともいえる小堀桂一郎、田中敏両教授が今月三月末日を以って御退休、すなわち専任の職をしりぞかれることになった。まことに寂寥に堪えない。

小堀・田中両教授を、もし日本文化学部の専任教授としてお迎えできないという事態が生じていたら、おそらく学部設置の実現は、きわめて難渋したにちがいない。当時は言語文化・生活芸術の教育課程の学際的融合という発想自体が、日本の大学関係者、並びに監督官庁各位に十分な理解がえられないということもあり、直接、青梅キャンパス設置の準備委員を前理事長故兎玉三夫先生より委嘱された田中教授と私は、何度も当時の文部省に足を運ばなければならなかった。

こうした今までの日本の大学に無かった新学部を実現させるためには、全カリキュラムを鳥瞰し、それぞれの分野に精通する学者の着任を必要とする。

小堀先生は比較文化、日本思想史、日本近代史、さらにドイツ語、ド

イツ文学を中心とする西洋文学全般において、現代の日本の学界を代表する碩学であり、日本美術関係にも造詣が深い。また、しきりにジャーナリズムに投ぜられる日本文化の現在と将来を憂慮する文明批評、時代批評にわたる数々の論策は、論旨まことに秋霜烈日、懦夫をして起たしめる気迫にみちており、等身の著書となって私共の前にある。先生の文章は時流に抗して正字・正仮名遣いが厳密に守られ、その端正で、古典的な文体は、かつての鷗外森林太郎の再来を思わせるものがある。

小堀先生の一日はおそらく読書、執筆にその大半が費やされているはずであるが、教室での学生への直接指導にあたっては精励恪勤、公務以外で休講されたことは一日もない。

こうした先生を窮屈なお人だと思うと大いに違う。時として学校の帰途、私共と地元の旗亭に足を運んでは談論風発、葡萄酒はつねに赤、グラス一杯のみ。痛飲して身の程もわきまえずに発する私共の暴言、頑愚を責め、たしなめることなどなく、いつも静かにグラスを口にされる。そうした先生の音容は、深い学識ときびしいモラルと鋭い美意識をもつ教養人の風格がある。私は個人として、明星大学青梅キャンパス日本文化学部に赴任された先生に、いわゆる「小堀学」の集大成の一日も早くんことを願ったが、果たしてお役に立つことができたか。非礼の罪をお詫びするばかりである。

田中敏教授は永らく明星大学のドイツ語教授として勤務され、職場の先輩である。先生は大学では経済学を専攻されたが、卒業後は日ならずして難関校、ドイツのゲーテ・インスティトゥットに学ばれ、ドイツ語教師の資格をとって帰国され、爾来、明星大学を本務校とし、他に早稲田大学、ドイツ文化研究所においてドイツ語、ドイツ文化の普及につとめ

られたが、田中先生を他の尋常、平凡なドイツ語教師と区別するものは、一つにかかって先生の日本文化への高い評価と深い愛惜にある。特に近時、ドイツの大戦の戦後処理についての問題追求の論文や講演は、ドイツ本国の新聞に、日本では『諸君』その他の総合雑誌に発表され、その気迫が多くの読者、聴衆を覚醒させたことは、天下周知の事実である。ドイツ語・日本語で書かれた先生の文章の一部は、すでに単行本となっているが、向後は益々ご健康に留意され、一層の成果を期して止まない。

最後に、残された私共は、ともすれば私学は志学であるという創設者の精神を忘れがちな現在の困難な時期にあたって、この両先生の大いなる遺産、学問と人格の一致という稀有の精神を多とし、なんとしてでも受け継いで行こうと、決意を新たにしている。両先生のさらなるご発展を祝し、聊か蕪辞をつらねて惜別の情とさせていただきます。次第である。